

巻頭言

よだかの自死

現代宗教研究所所長 三原正資

「あなたは自死者の葬儀を体験したことがありますか？ そのときあなたは、自死を選ばざるを得ないところまで追い込まれた故人の気持ちに思いを馳せることができましたか？」

という問いかけから始まった第三十四回京浜教区教化研究会議（平成二十二年二月二十六日会場 新宿・常圓寺）。

講師のひとり、清水康之氏（NPO法人「自殺対策支援センター・ライフリンク」代表）が用意した、東京マラソンの映像は会議参加者の心につよい印象を残した。

東京マラソンのランナーは三万人余。三万人のランナーがある地点を通過するために要する時間は二十分。その洪水のように流れるランナーと同じ数の人びとが、毎年、自死している。大蔵経の一つに賢愚経というお経がある。全十三巻、仏教時代のインドの興味深い説話をおさめたこの経は、わが国の今昔物語の成立にも影響を与えたといわれる。奈良時代に書写され、「大聖武」と呼ばれ珍重されている。

この中には自死をあつかった説話がある。私の気付いたところでは、「降六師品」と「沙弥守戒自殺品」。一つは沙弥が戒を守るために自死する説話。「降六師品」には、顔かたちがみにくく「醜王子」と呼ばれた一王子が女性から結婚をことわられて自死を考えるにいたる

物語がふくまれている。次は、その後半部分である。

醜王子は妻を責めて、「あなたは、以前、突然、夜中に、なぜ私を棄てて逃げたのか」と言った。妻は「あなたの顔かたちは極めて醜い。あの夜、初めてあなたの顔をはつきりと目にしたときには、とても人とは思えなかった」と答えた。

このようになじられた醜王子は、初めて鏡を手にとつて、自分の顔かたちをつくづく眺めた。賢愚経は、醜王子の形状を「熟する株しゅこの如し」と形容する。株は樹木の切り株、杓は枝のないごつごつとした樹のことである。鏡に映った自分のみにくい容貌に驚いた醜王子は、絶望のあまり自死しようとしたところを、帝釈天の力によって助かるという物語である。「身体醜形障害」という病気がある。それは、人が実際以上に、極端に自分の容貌をみにくいと感ずる症状となつてあらわれる。たとえば年ごろの女性が、「お父さんにそっくりね。美人のお母さんに似ればよかつたのに……」と、何気なく言われている間に、発症することもあるという。

父母さえも、醜王子をみにくいと思つていた。しかし、妻となつた女性に指摘され、鏡に自分の顔かたちを映すこと、すなわち、世間一般の価値観によつて自分の容貌を判断するまでは醜王子はあえて自分を醜いと思わなかつた点が、現代の「身体醜形障害」と関連して興味深い。そして、この自死を考えた悩める王子を釈尊の前生と見たところに、自死者に対する当時の仏教徒のやさしい視線を感じられないだろうか。

かつて、私は、宮沢賢治は法華経（提婆達多品）に説かれる龍女成仏の説話をもとに、童話「よだかの星」を構想した、と論じたことがあつた（『正法』六十八号所収「宇宙意思に

生きる―『よだかの星』より―」日蓮宗新聞社 一九九六年）

「よだかの星」で表現したかったことと法華経とは、どう関わっているのでしょうか。

よだかは姿形がみにくいために他の鳥から馬鹿にされ、さらに鷹からは名前を変えようにと威されます。鳥たちからのイジメと自分も小さな虫を食べて生きているという罪悪感から、よだかは遠い空の彼方に行こうと決心します。

空に向かって飛び立ったよだかは最初は太陽、そして西のオリオン、南の大犬、北の大熊、東の鷹の星に向かって飛んでいきますが、星々からも馬鹿にされ、相手にしてもらえません。そして力尽きて地面に落ちる寸前、よだかは舞い上がってどこまでも昇っていききました。そしてよだかはカシオピア座の近くで青く美しく光っている自分を見ました。

私は「よだかの星」のあらすじをこのように記し、龍女成仏の概略にふれ、その一段との照応を次のように述べた。

最初によだかは「いったい僕は、なぜこうみんなにいやがられるのだろう」と思うのですが、智積や舍利弗の非難を耳にした龍女も同じ思いをいただいたにちがいありません。なぜならば龍は蛇、皆嫌がりますね。しかし外見で判断してもらっては困ると龍女も思ったことでしょう。

つぎによだかが星の世界へ飛んでいこうとすると、大犬星はよだかに「馬鹿を云うな。

おまえなんか一体どんなものだい。たかが鳥じゃないか。おまえのはねでここまで来るには、億年兆年億兆年だ。」と言います。この言葉はさきほどの智積や舍利弗の龍女への非難とまったく同じであるといってもいいでしょう。

そして最後に、よだかが星となつて輝いている様子と龍女が遙か遠い世界で仏に成つて
いる光景はよく似ています。

そして私は、「よだかの星」のメッセージを次のように書いた。

賢治はこの童話で、不当に卑しめられている生き物―社会の多くのよだかたち―を励ましています。(略) よだかや龍女が内面に素晴らしい宝を秘めているように、外見や境遇に迷わされることなくお互いを尊重する世界を作っていくことの大切さを私たちに訴えているのです。

ところで、私は、よだかはいじめの中で死んで星となつたと漠然と考えていたが、じつは自死というべきものだったことを、最近、道尾秀介氏の小説『シャドウ』（東京創元社 二〇〇六年）によつて知った。

『シャドウ』の巻頭には、「よだかの星」の終りの文章がエピグラフとして掲載されている。「よだかの星」を愛読する登場人物のひとりには、「よだかは、幸せだったのよね」とつぶやいたのち、屋上から地面に向かつて、身体を投じるのである。

さて、三・一一以後、騒然として将来が不透明な世情はしばしば戦前の日本と比較され、私たちの識見と生き方が、あらためて問われる時代になっている。このようなとき、私は、戦前は言論人として「小日本主義」を主張し、戦後は首相にもなった政治家として、しかも日蓮宗と深い関わりをもち、長く立正大学学長だった石橋湛山先生（一八八四～一九七三）を想い起こす。

石村柳三氏は『石橋湛山―信念を背負った言説』（高文堂出版社 平成十六年）の中で次のように評している。

石橋湛山は、言論を武器にして言論の重要性を叫び、治安維持法を批判し、さらには軍部の横行を批判し、侵略戦争を批判し、そして東条内閣の辞職を要求し、無意味な竹槍戦争観を否定し、早期終戦を望む言論を吐きつづけたのであった。

当時の思想統制、言論弾圧の時代にあつて、よくも勇氣ある発言と、その信念に驚かざるをえない。

立正安国・お題目結縁運動のスローガン「いのちに合掌」は、一人ひとりの生きる権利を尊重することから始まるが、それには湛山先生のような識見と覚悟が必要であることを、今、私たちは思い返さなければならぬのではなからうか。

それにしても、星になつて輝かなくてもよいから、よだかはよだかのまま、自死することなく生きてもらいたかつたと、今の私は思っている。

第四十四回中央教化研究会議 基調報告

「イーハトヴと宮澤賢治」

三原正資

司会 現宗研所長、三原正資より基調報告、「イーハトヴと宮澤賢治」と題する基調報告をさせていただきます。

三原 花巻に参りましたのは、五月の連休が終わって間もなくのことでした。まだまだ新幹線は定時運行しておりませんでしたから、空路秋田へ飛び、秋田からレンタカーを借りて花巻へまいりました。鳥海山や岩手山にはまだまだ雪が残っておりまして、山に入りますと桜の花が散っているという、大変美しい季節でした。

イーハトヴですが、これは宮澤賢治記念館から、花巻の町を見下ろした風景です。田んぼには田植えの水が張られます、大変美しい季節でした。

イーハトヴとは、すべてがここに並び立ちながら、相犯さない理想の世界、こういうふうには宮澤賢治に近い人々を考えていたようです。

これは『銀河鉄道の夜』という賢治の代表作の中の有名な言葉ですが、「ぼくたちここで天上よりもっといいところをこささなければいけないって僕の先生が云ったよ」。

「僕の先生」というのは日蓮聖人であるとか、あるいはまた田中智学先生であるとか言われております。要するに、

この地上に天上よりもっとすばらしい常寂光土を建設しなければいけないと僕の先生が言ってるんだ。これがおそらくイーハトヴを意味している言葉であろうかと思えます。

宮澤賢治記念館に行きましたら、ちょうどかわいい猫が外にいました。実は宮澤賢治の童話っていうのは、山猫とか熊とか、猫とかいろいろ動物が出てまいりまして、それが何ら人間と差別のないものとして描かれております。二十世紀の文明というものは人間中心の文明であると言われていますが、宮澤賢治は二十世紀の初めに、すでにその人間中心の文明の危険を認識して、植物も動物も、あらゆる命、いわゆる一切衆生が幸せに暮らしていかなければいけないという世界を目指していったわけです。

これは、『春と修羅』の中にある詩の一節です。「何と云はれても わたくしはひかる水玉 つめたい雫 すきとほつた雨つぶを 枝いっぱいにみてた 若い山ぐみの木なのである」と。すなわち、「山ぐみの木」というものの中に宮澤賢治が入っているのですね。入って自分は木として発言しています。草木国土一体の世界を示しています。

これは大震災後間もなく、東北地方の人々にとって「雨ニモマケズ」の詩が大変心の支えになってきているということを各メディアが報道した新聞です。

次のもそうです。これは宮澤賢治記念館の副館長が賢治を解説しています。「震災で光が当たる宮澤賢治の作品」ということで、例えば新潮文庫の宮澤賢治の作品集は、震災以後約二倍の売れ行きを示したと伝えられています。

さて宮澤賢治は一八九六年(明治二十九年)に生まれ、一九三三年(昭和八年)に亡くなりました。三十七歳の生涯でした。生まれた年には三陸の大津波、大地震。それから一九二三には関東大震災、一九三一年には東北冷害、それから満州事変が勃発しまして、これ以後日本は、日中戦争、そしてアメリカとの戦争に入っていくわけです。

そして、亡くなる年の一九三三年、三陸大地震、大津波が起こっています。今日と同じように危機的な状況に生きるといふことで、賢治は注目されているわけです。

これは花巻にある賢治の生家です。門は、おそらく賢治の生前からある門です。宮澤商店も残っています。

これは賢治の菩提寺、浄土真宗大谷派の安浄寺ですが、実家のすぐ近くににあります。賢治の妹トシの葬式もここで行われ、三十七歳で亡くなった賢治の葬儀も、この安浄寺で行われております。

今日配られました分銅先生の本を読んでおりましたら、賢治の葬式のとくに賢治の霊、姿がさびしそうにそこに座っていたよという言い伝えがあったということが分銅先生の本に書かれてありますので、どうかまたご参照ください。それは、自分が一生懸命信じていた法華経ではなくて、浄土真宗によって葬儀が行われたということで、非常に賢治がさびしそうにしていたよということを賢治の姪が、お父さんの政次郎に言うのですね。そういうことが積み重なって、お父さんは後に改宗していくわけです。

さて、宮澤政次郎という人は花巻の仏教界でも有力な人で、花巻夏期仏教講習会を幹事として催し、そこにはあつ鳥敏がすはやを招いています。浄土真宗大谷派の革新運動、清沢満之が始めました精神主義運動を支えた浄土真宗の有名な学者です。

それから鳥地大等。このかたは浄土真宗本願寺派の僧侶で、天台教学の権威と言われたかたです。

尾崎文英は曹洞宗の僧侶で、盛岡のお寺の住職でした。

こういう当代を代表する立派な僧侶による講習会を、宮澤賢治は幼児期から聞いて親しんでいたわけですね。そういう点で、仏教的な素養は各宗にわたっていたと言えると思います。

これは盛岡中学時代の下宿先清養院です。盛岡市の北山というところに各宗のお寺が並んでいます。その一カ寺です。これもその一カ寺で、下宿先で徳玄寺と言います。

これは先ほど紹介しました尾崎文英が住職をしていました曹洞宗報恩寺です。岩手県に二百カ寺の末寺がある本寺で、大変立派なお寺で五百羅漢がお祭りしてあります。これは仁王門ですね。大変立派な彫刻でした。これが報恩寺

の本堂です。

これは五百羅漢堂の中です。私たちは五百円の入場料を払い、自由に拝観させていただきました。この本尊が面白く、中央の本尊が毘盧遮那仏びるしなぶつ、向かって右が、華嚴経に説かれている善財童子。それから左が、法華経提婆達多品の八歳の童女。これを脇士として本尊としていました。

その前にあるのが、十大弟子です。自由に本尊が造れるのだなと思って大変うらやましく思った次第です。

なかなか面白い姿の羅漢さんがいまして、おそらく当時の曹洞宗の坊さんにはこんな坊さんがたくさんいたんだろうと思います。

これは盛岡カソリック教会堂ですが、大学の敷地に移転され再建されています。建物はプジェー神父のデザインです。プジェー神父のもとに、賢治は通ってキリスト教の勉強をしたのです。あともう一人プロテスタントの牧師さんとも、非常に親交があったと伝えられています。非常に美しい教会堂です。

さて、宮澤賢治は一九一四年、第一次世界大戦が始まった年に「赤い経巻」と呼ばれた法華経と出会います。『漢和対照妙法蓮華経』です。

これを編集したのが、浄土真宗本願寺派盛岡願教寺の住職、島地大等です。このかたは明治の傑僧と言われた島地黙雷の弟子でした。この『漢和対照妙法蓮華経』を読んで、非常に感動したと言われています。その感動がもとになり、当時、岩手県地方に一生懸命布教をしておりました国柱会に入っていくわけです。賢治二十四歳のときに国柱会入会。これがそのときに授与された大曼荼羅です。

この国柱会を創立したのは、田中智学です。一九一四年の事です。この田中智学という人は、日蓮宗の新井日薩あらいにっさつの弟子になったのですが、後に還俗をしました。この新井日薩が、師匠の優陀那院日輝うだないにちき和上の法勲わじょうをたたえた碑が、此経難持坂を上がって、仁王門の手前の右のほうにあります。ここに優陀那日輝の碑があり、作ったのは新井日薩です。

その新井日薩の弟子になったのが田中智学です。

田中智学法勲碑が身延山にあります。この碑には、「明治・大正・昭和の三代にわたって純正日蓮主義を宣揚し、日本国体を開顕し、祖廟中心、宗門統一を主張して、正法正義の広布に一生をささげた故田中智学先生一代の法勲を偲び、これを後世に伝えるべく、先生が亡くなられた直後、宗門の有志によって建立を發起されたものである」と説明があります。題字は身延山法主望月日謙師、撰文は酒井日慎師、文字は持田雲道師ということで、当時の日蓮宗の中枢にあるかたがたと、田中智学は交流していたということが言えるかと思えます。

これが、その法勲碑です。身延山にあります。また、身延山奥の院には田中智学の詩碑もあります。

さて、これは『日蓮聖人御遺文』です。宮澤賢治が愛読したご遺文です。神保町の古書店に行きましたら十五万円の値がついておりましたので、お持ちのかたは大事に保存をしてくださりたいと思います。

これは、田中智学の『日蓮聖人の教義』、一九一〇年の発行です。これは私が入手した本ですが、百年たっているとは想像できないくらい立派な製本で、当時の価格で二円五十銭です。田中智学の文章を読みますと、自分はわざわざ、高くても立派な本を作ったんだということが書かれています。

表紙に星印が四つついていますが、これは第四版という意味です。一版重ねるごとに星印をつけていくのだというので、当時、田中智学が出版に力を込めたことがうかがえます。

賢治は、この『日蓮聖人の教義』を熟読しました。先ほどご紹介しました『銀河鉄道の夜』の、「この地上に天上よりももっと立派なところを作るんだ」という一節、まさにそのままのことが『日蓮聖人の教義』には書いてあります。

これは田中智学の弟子、山川智応の『和訳法華経』です。一九一二年に出版されていますが、この本を基にして鳥地大等は『漢和対照妙法蓮華経』を編纂したと言われています。特にこの中で、山川智応は寿量品の「六或示現」の

説明をして、宗教の統一ということを述べています。おそらくそのあたりに宮澤賢治は大変感心して、『銀河鉄道の夜』の中に思想が盛り込まれております。

これですね。「本当の神様はもろんたった一人です」というのは、キリスト教の牧師さんの発言ですが、それに對して、「そんなんでなしに、たった一人の本当の本当の神様がいるのだ」とあります。すなわちキリスト教の神の根源には寿量品に説かれている久遠実成仏がいらっしやるんだという思想を背景におかないと、この『銀河鉄道の夜』の一節は理解できないわけです。

さて、宮澤賢治は、二十五歳のとき花巻農学校の先生になります。この四年間が、賢治のもっとも幸せな時代であったと言われています。先生の給料は当時で八十円。現代のお金に直しますと大体四十万円と言われ、二十五歳にして四十万円の月給があれば、大変楽しかったことと思います。

さて、一九二四年、花巻農学校の最後の年、宮澤賢治は『春と修羅』という詩集を刊行します。これは、当時ほとんど売れ残ったと言われていますが、一部の人たちからは激賞され、宮澤賢治は、生前もかなり知られ、死後すぐに有名になっていくわけです。おそらく宗門のかたが宮澤賢治を読もうというときに障害になるのが、この詩だと思えます。これは相当とっつきにくい、難解な詩ですが、しかし、今なお新鮮な印象を与える詩です。

これは『春と修羅』を印刷した工場が、現在もそのまま照井菓子店として残っています。ここのお団子はうまいという評判で、中へ入って、当時印刷所の機械が置かれてあったろうと思われる土間に立って、私たちは団子を食べたのです。まだまだこういう古い建物が花巻には残っています。

これはその『春と修羅』の有名な「序」ですが、「わたくしといふ現象は 假定された有機交流電燈の ひとつの青い照明です」「光はたもち、その電燈は失はれ」とあります。「光はたもつ」ということで、電燈、すなわちわれわれの肉体というものは失われても、光すなわちわれわれの魂は残っていくんだということを、彼はここで表明してい

るわけです。

これは、農学校時代に賢治が通った食堂やぶ屋です。賢治はサイダーを大変好み、そばとサイダーを一緒に食べて飲んでいたと言われています。

これは、一九二四年同じ年に彼が刊行しました『イーハトヴ童話集 注文の多い料理店』です。本の表紙を見ますとイーハトヴとなっています。先ほどの『春と修羅』とこの『注文の多い料理店』の二冊が生前刊行された本です。刊行した出版社は光原社と言います。この光原社というのは賢治が命名し、現在盛岡に現存しています。

これは、棟方志功が揮毫した光原社という社名です。初代社長の及川四郎さんというかたは、駒場の日本民藝館を創立しました柳宗悦と親交があり、宗悦の手紙、棟方志功の手紙等、当時の民芸運動を推進した人の手紙がずいぶん残っております。

ちなみに、柳宗悦という人は元々六本木あたりに住んでおり、日蓮宗だったので。ところがこのかたは、当時日蓮宗が右傾化して軍部との結びつきを強めていくことに我慢ならなかったということから、浄土真宗に改宗していくのです。

つまりその当時、日蓮宗からは柳宗悦が浄土真宗へ、浄土真宗からは宮澤賢治が日蓮宗に改宗するということになったのです。

これは光原社の中で、そこは喫茶店になっており、及川社長からコーヒーをごちそうになり、いろんなお話や、非常に役に立ちました資料を頂戴したわけです。

さて昭和元年、一九二六年、賢治は三十歳のときに、今日のテーマの一つである羅須地人協会らすぢじんきょうかいを設立します。羅須地人協会の「地人」という言葉は、「地涌の菩薩」と深い関係があるかと思えます。これは賢治が、月給八十円の地方の名士である先生の地位を捨てて、農民と一緒に地べたをはいずり回ろうという決意をして、この協会を設立

したわけです。

現在、県立花巻農業高等学校の敷地の中に移築されています。ちょうどこの向こうが、花巻空港になっております。これが有名な、賢治が帽子をかぶって歩いている姿ですが、私は長く、宮澤賢治という人はこういうふうに向き加減に歩きながら、常に農民のことを考えていたんだと思っていました。宮澤賢治はベーターベンを尊敬しており、ベーターベンが歩く恰好をマネしたんだということです。そういうユーモアのセンスにもあふれた人でした。

これが羅須地人協会が置かれた宮澤家の別宅です。大正モダンの優美な建築だと思います。

これはその裏のほうですが、ここに入り口があります。

これが入り口を入ったところです。右のほうに見えるのが、賢治が楽器を鳴らしたり、レコードを聴いたり、また周囲の人々にいろんな話をしたところです。

この畳が敷かれている八畳の座敷、ここで妹トシも療養をしたと言われています。この右側の廊下の奥が便所になっており、便所の隣がお風呂ですが、当時の東北の家にトイレとお風呂がついているのは大変珍しかったと言われています。

これは、羅須地人協会が移転される前にあったところで、「雨ニモマケズ」の中に、「野原ノ松ノ林ノ中ニ」という一節がありますが、本当にその言葉どおりの、松の林に囲まれた非常にいい場所です。現在そこには、高村光太郎が書きました「雨ニモマケズ」の碑が立っています。

この「雨ニモマケズ」の碑のある広場から眺めた北上川です。

これは、その北上川のほうに畑があり、「下の畑に自分は今いますから、そちらのほうに来てください」という意味のことばが書いてありました。これが賢治自耕の畑と言われて、現在、地元のかたが耕されていました。

これは賢治自耕の地から北上川を見たところです。

さて、実は北上川と銀河が深い関係にあるということを、ちょっと頭においていたかと思えます。賢治は小さいころから、夜空にきらめく星や銀河を眺めて飽きなかったと言いつたに聞かれています。これはある童話の挿画です。子どもが銀河を眺めているところです。

これは『銀河鉄道の夜』の最初の一節です。

今日、宮澤和樹さんの本が各自一冊配られたと思いますが、その中に『銀河鉄道の夜』の一番最初のこの一節が出ています。「ではみなさんは、そういうふうな川だと云われたり、乳の流れたとどと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところを指しながら、みんなに問をかけました（略）『私どもも天の川の水の中に住んでいるわけです』。こういうふうなところがあるのですが、この黒い星座の図、その中に銀河が流れているということを頭の中に置いておいていただきたいと思えます。

これは黒い星座の図ですが、「その真ん中には上から下へかけて銀河がぼーっと煙ったような帯になって、その下のほうでは、かすかに爆発して湯気でも上げているように見える」。次にお曼荼羅が出てまいります、私はちょうど十五年ぐらい前の現代宗教研究所の所報に書きましたが、この大曼荼羅と黒い星座の図、実際の空にかかっている天の川、そして地上を流れている北上川とを、象徴的に同じものとして賢治は見ていたのではないか。「黒い唐草のような模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したもの」は、これはサンスクリット語の経題であるとも言われていますが、お題目に日蓮花押と加えればちょうど「十ばかり」になります。

これも、『銀河鉄道の夜』の一節です。「下流のほうは川幅一ぱい銀河が巨きく写ってまるで水のないそのままの空のように見えました」。すなわち、天上にある天の川が、地上の北上川にそのまま映っているという光景を書いているのです。天上にある寂光土を、この地上にもわれわれは建設できるんだという、意気込みを述べたところではない

か。「娑婆即寂光」を表現した、最も美しい言葉の一つではないかと思えます。

この北上川が花巻の平野に流れている。天上にもお曼荼羅があるけれども、地上にもお題目の象徴として北上川があるように、ここにお曼荼羅と同じ常寂光土を建設していかなければいけないということを彼は考えたのではないかと思っています。

これは、ある童話の一節ですが、「私はどこへもいきません。いつでもあなたが考えるそこに居ります」という簡単な言葉ですが、これは宮澤賢治が久遠本仏を表現したのではないかと思うのです。いつでもそこにいる、常に私たちのかたわらにいるという、こういう強い確信が彼にはあったんではないか。私たちも、仏様は常に私たちとともに今いらっしやるという信仰を持ちたいなと思っています。

ちよつと脱線しますが、但行礼拝というのは、私たちが仏様を拝むのではなくて、常に仏様のほうから私たちは拝まれているということに気づくということに信仰の大切さがあるのではないかなと思います。

これが『雨ニモマケズ手帳』です。これは明日おいでになる林風舎の宮澤和樹さんがこれを復刻しています。二千五百円で販売する予定です。この「雨ニモマケズ」を賢治は上京をした東京の宿の中で、一人でこの孤独な言葉を書き連ねていくのです。

これが、その「雨ニモマケズ」の最後の、ご本尊が書かれたところですよ。あるかたは、「これは宮澤賢治のマイ仏壇、自分の仏壇なんだ」と、表現していました。自分の仏壇に向かって誓いの言葉を述べている、「サウイフモノニワタシハナリタイ」と、必死に祈ったんだらうなということがうかがえます。

「こんやもうこゝで誰にも見られず ひとり死んでもいゝのだと いくたびさうも考をきめ 自分で自分に教へながら またなまぬるく あたらしい血が湧くたび なほほのじろくわたくしはおびえる」と、記しています。一人病気で、死の予感にふるえながら、必死にこの「雨ニモマケズ」を書きつけた。そして、仏様お守りくださいと祈った

のです。私は『雨ニモマケズ手帳』を買い、自分が病気になったら、それを持っていようかなと考えています。

身延山の山門を入りまして菩提梯に向かっていると、右手にこの歌碑があります。「塵点の劫をし過ぎていましこの妙のみ法にあひまつりしを」というこの歌は、先ほどの『雨ニモマケズ手帳』の中に秘かに入っていた歌です。

私は四十数年前に身延山高校に入り、そのときに、ああこういう碑があるのかということがきっかけになって宮澤賢治を読みました。

花巻では、宮澤賢治のお墓がございます身照寺に参りました。賢治三十七歳のとき、九月二十一日に彼は亡くなり、後になりました、この身照寺に彼のお墓は改葬されました。

これは身照寺の本堂です。この本堂の裏手に宮澤家の墓所があります。「骨堂」と書かれた右のお墓が、先祖代々のお骨が納まったお墓で、骨堂というのは岩手県独特の表現のようです。それから右のほうの五輪塔が。賢治のお墓です。ここにお参りました。

これは賢治の遺言で、賢治一回忌のときに千冊作られて配布された『国訳妙法蓮華経』です。この中に「私の全生涯の仕事は此経をあなたのお手許に届け、そしてその中にある仏意に觸れて、あなたが無上道に入られんことをお願ひする外ありません。昭和八年九月二十一日 臨終の日に於いて 宮澤賢治」とあります。この賢治の遺志を継ぎ、お父さんの宮澤政次郎さんと、それから弟の清六さんが一生懸命頑張られたわけです。

この言葉を見れば、宮澤賢治がこの法華経を信仰し、その作品はすべてこの法華経を表現したものであるということももうかがえるわけです。

さて、宮澤賢治への一般の人の共感の理由ですが、これは今年の一月に、「アメリカ仏教」という題で武蔵野大学のケネス・田中先生が講演されましたが、その中にアメリカ仏教の特徴というものを七点あげられ、その中に、おそらく宮澤賢治への共感の理由ではないかなというものがあります。一つには超宗派性という点です。これは、法華

経というのは元々、私は超宗派性だと思うのです。六或示現ということが説かれている法華経は超宗派性を目指した經典です。日蓮聖人も、「いずれの宗の元祖にも非ず」とおっしゃっておられますので、超宗派性を目指しています。それから平等性。これは在家も出家も平等に、男も女も平等にという平等性は平等大慧^{だいゑ}ということで法華経から出ていると言えます。

社会参加。これはアメリカ仏教に特徴的なものですが、宮澤賢治は羅須地人協会の活動をして、社会に具体的な活動をしていきましたが、これも菩薩行という法華経の特徴であると思います。

また、先般講演されました鈴木隆泰先生の「葬式仏教」の中にも、この社会参加、社会運動ということが、法華経あるいは日本仏教の大きな特色であって非常に大事な点だということが述べられておりました。

こういう点が宮澤賢治への共感の理由ですが、今日の宗門運動を行っています日蓮宗教師が心の隅においてしかるべき点であろうと考えます。

現在非常に多くの作品が出ています。一番読んで楽しかったのが漫画の宮澤賢治。小学生用の賢治の本です。難しい本を読むよりもむしろこういう本を読むほうが、いかに宮澤賢治が愛されてるか、しかもどういふ点が人々によって愛されているかということが分かると思います。

それから、東北地方の小学校にあった「雨ニモマケズ」の碑が大震災によって壊れ、これは、NHKが放映したある番組で使われた映像ですが、これなんか、本当に、今回の大震災にも負けないでがんばるぞという東北の人々の気持ちが見られるのではないかなということ、これをスライドの最後に取り入れました。

これで報告とさせていただきます。ご清聴、どうもありがとうございました。

司会 現宗研、三原所長による基調報告でございました。

質疑応答の時間をとってございます。何かご質問のあるかたがございましたら挙手をお願いいたします。

○ どの出版社とか、どの会社名とか、ちょっとお教え願えば、水曜道場でも使えるのではないかと思います。

三原 東京駅丸の内オアゾの丸善へ行きましたら児童書コーナーがありまして、賢治の本は本当にたくさん並んでるんです。どの会社というのとは分かりませんが、インターネットで調べていただければすぐ分かります。

司会 他にいかがでございましょう。お話の中に出てまいりましたが、皆様のお手元に、明日ご講演をいただく宮澤和樹さん監修でございます『宮澤賢治魂の言葉』というのが、今年の何月でしたか、奥付に発行日を書いてないです。震災後発行されたものでございますが、そちらの始めのほうにも口絵で『雨ニモマケズ手帳』の「雨ニモマケズ」の部分写真が出てまいりました、スライドで出てまいりました略曼茶羅の部分など、収録されております。

また、現宗研の創立三十周年のときの記念講演、これも所長のお話の中にございました分銅^{ぶんどう}惇^{じゆん}作^{さく}先生の記念講演、「宮澤賢治と法華経」というのを収録した冊子がまだ、今日お集まりをいただいているかたにお配りする程度は残部がございましたので、資料として配布をさせていただきますので、ぜひご参照をいただければと思います。

○ ちょっと難しいことになるのかなと思うんですが、最初のご挨拶でも原発のお話をされて、これは非常に深刻な話なんです、この時代認識ということだね、われわれの立場からどう考えたらいいか、非常に難しい問題だと思うんですが、二十世紀が人間中心の文明という、そういう宮澤先生の考え方は、それを超えていくと、人間中心ではないもつと広いものだというお話でございしますが、世界に何百基とある原発というものを、強調されたわけですが、

実はご承知のように、原発よりもさらに核兵器というものがございまして、一応なくしていこうという話もちらつとあるわけですが、実際には、今日まで、はるかに原発を超える、比較にならないほど強力な、全人類を一千回ぐらい全部殺せるような核兵器が存在しているという現実の中で私たちは生きていくわけでございますので、突然この四百基、五百基の原発というのをだけを強調されるのは、認識としてはどうなんだろうという、素朴な問題提起でございます。

三原 おっしゃるとおりだと思います。核兵器につきましては今までもずっと発言されてきておりますし、核兵器反対運動というのが起こっておりますが、原発につきましては、ちよつと状況が違う。これは国策として戦後ずっと推進されてきました。

これは私が九月の『宗報』に書いたもので、もうすぐお目に入るかと思いますが、長田新さんというかたが編集され、広島で被爆した遺児たちの文を集めた『原爆の子』は、昭和二十六年に岩波書店から出ておりますが、その序文を見てびっくりいたしました。

そこには、原子力の平和利用ということで、「これは人類の未来の夢であり、希望である」ということが書かれています。こういうものが昭和二十六年の原爆死没者七回忌のときに出版されているということをご存知なかったことの不明を感じます。

被団協の坪井直^{すなお}さんも、「今年からは核兵器だけではなくて、原発にも反対する姿勢を示す」とおっしゃっておられましたけれども、被団協、被ばく者の団体でさえも、原発というものについては、相当内部で対立もあったようございますが、今までは反対を公にはしてこなかった。こういう経緯がありますので、特に二〇一一年というのは、新たに原発というものが人類にとっての本当の脅威であるということが改めて認識されたということで強調させてい

ただいた次第です。

司会 この問題、分科会で、原発問題を取り上げさせていただいておりますので、十分な議論を頂ければと思います。

予定の時間となっておりますので、基調報告はここまでとさせていただきます。

三原 どうもありがとうございました。

特に国柱会関係については、今日、正木先生が詳しくご講演されると思いますので、どうぞよろしく願います。ありがとうございます。

司会 すみません。引き続き、冒頭の日程説明で申しましたように写真、記念写真の撮影に移らせていただきます。

イーハトヴと宮沢賢治―花巻を訪れて―

●イーハトヴ・岩手の初夏、宮沢賢治記念館から眺める若葉におおわれた花巻の山野は美しい。広場で遊ぶ猫をみていると、山猫や熊を生き生きと描いた賢治の童話が思い浮ぶ。彼の童話の世界では動物や植物、そして人間は等しく「いのち」の仲間である。この意味で、彼の文学は人間中心の近代文明への異義申し立てといえよう。三月一日に東北大震災が発生すると、苦しみに呻吟する人びとを励ますために賢治の「雨ニモマケズ」が朗読された。それは原子女力発電所の事故をもたらした現代文明に対する「いのちの復権」への願いのようでもあった。宮沢賢治（一八九六～一九三三）が法華経と出会って約一〇〇年がたつ。宇宙の生きとし生けるいのちの幸せを祈ることを彼は法華経の実践とうけとめた。

●今ものこる賢治の実家、その黒い門を見ながらしばらく行くと、浄土真宗大谷派安浄寺がある。宮沢家の菩提寺だった。幼少年期の賢治は、父・政次郎を中心に形成された花巻の宗教サロンの中で恵まれた時を過ごした。仏教の革新をめざす清沢満之が始めた「精神主義」運動をすすめた暁烏敏、天台教学の泰斗・島地大等等、招かれた著名な講師の声にふれながら、彼の宗教的資質は養なわれた。しかし、家業は災害や飢饉によって逼迫した農民を相手とする質・古着商であった。宮沢家に内在するこの聖と俗の大きな落差が青年期の彼に煩悶をもたらし、同時に、ときに激しさを帯びた彼の宗教的人格を形成したのではなからうか。

●一九一四年、一八歳の賢治は盛岡市願教寺住職島地大等の著わした『漢和対照妙法蓮華経』を読んで感動した。のちに「雨ニモマケズ」手帳から発見された「塵点の劫をし過ぎて今しこの妙のみ法に値いまつりしを」という短歌には、このときの賢治のよろこびがこめられていると思われる。（この歌碑は身延山の三門を入った右手にある）

賢治はなぜ法華経に感動したのか。これは彼の一生をふり返つての推測だが、一八歳の賢治が内心にいだいていた諸問題を解決する道が、法華経に示されていたからではなからうか。

それは、古来、法華経の特色といわれる諸教を統一する一乗の教え、仏陀の永遠のいのちを明かした久遠実成の教え、衆生救済を目的とした菩薩行の教えである。これらの教えは彼の作品や生涯に反映している。

●今日、賢治は詩集『春と修羅』、童話集『注文の多い料理店』や『銀河鉄道の夜』の作者として知られている。しかし、作品が成立した原因は、賢治が一九二〇年、「日蓮主義」運動を推進していた田中智学の国柱会に入会し、その過程で、法華経の教えを広めるために「法華文学ノ創作」を勧められたからにはかならない。彼の作品は、いわば宗教文学である。

●賢治の作品を読むと、法華経の豊かな思想にふれることができる。もっとも賢治は法華経の教えを直接に作品に盛り込むことは避けた。その工夫の一端を『銀河鉄道の夜』から紹介しよう。

この作品の主題は「銀河」とは何かである。それは物語の冒頭に次のように語られる。

「ではみなさんは、そういうふう川だと云はれたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」先生は黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところを指しながら、みんなに問をかけました。」

この星座図の銀河はつぎのようにも表現されている。

そのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむったような帯になってその下の方ではかすかに爆発して湯気でもあげているように見えるのでした。

私は、これを大曼荼羅の七字の題目、署名と花押を表現したものと考えている。さらに物語の最終章「ジヨバンニの切符」には法華経の衣裏珠の譬えを彷彿とさせる、主人公が「四つに折ったはがきぐらいの大きさの緑いろの紙」

がポケットの中にあることに気づく場面がある。その「緑いろの紙」は次のように描写されている。

それはいちめん黒い唐草のような模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したものでだまって見ていると何だかその中へ吸い込まれてしまうような気がするのです。

「十ばかりの字」は梵語の法華経の題名だという説もあるが、私はこれは大曼荼羅の題目、署名と花押であると考えている。また、国柱会から授与された大曼荼羅の協書には「久遠本佛之實體」と記されている。これらのことから賢治は銀河を久遠本仏の象徴と考えていたと思われる。

そして物語の冒頭で生徒に投げかけた「このぼんやりと白いものがほんとうは何か」という質問に「私どもも天の川の水の中に棲んでいるわけです。」と答えている。

これは、私たちは銀河の中に生きているが、その「ほんとう」の意味は、私たちは久遠本仏の中に生きている、そして、この世界は浄土であるという法華経の信仰を物語ったのであり、賢治はこの「ほんとう」の主題を物語の中にたくみに隠したのである。

●賢治のいう「イーハトヴ」とは、この法華経の娑婆即寂光の教えを目指したものである。『銀河鉄道の夜』の中では、そのことが

ぼくたちここで天上よりもっといいところをこさえなけあいけないうって僕の先生が云ったよ

と語られている。また、

下流の方は川はば一ぱい銀河が巨きく写ってまるで水のないそのままのそらのように見えました。

という一節も、天上と地上すなわち寂光と娑婆とが二つでありながら一つであることを美しく表現したものである。

現在、北上川にかかる橋の上に立って、花巻をとりまく岩手の山々を見渡すと、この地をイーハトヴにしたいと願った賢治の願いがわかる。

イーハトヴ実現のために、賢治は羅須地人協会⇨農民塾を開いたといえよう。この活動の舞台となった宮沢家の別宅は、現在、岩手県立花巻農業高校の前庭に移築され、大切に保存されている。この建物の前に佇ずむと、彼が地元の人びとに今もつよく敬愛されていることを感じる。

●「雨ニモマケズ」は、この東北大震災をきっかけに、日本国内のみならず、ワシントンやロンドンのキリスト教の教会においても、日本語や英語で朗読された。「雨ニモマケズ」は、イーハトヴを実現しようとした賢治の願いと実践が示されたものであり、そこには法華経の菩薩行が表現されている。

●本年一月、教団論セミナーにおいて武蔵野大学教授ケネス・田中氏は、「アメリカ仏教」の特色をいくつか述べられた。その中の「超宗派性」「平等性」「社会参加」等の諸点は宮沢賢治の実践と共通すると思われる。この点は、私たちの現在と将来を考える上で、一つの参考になるのではなからうか。